CASE STUDY 4

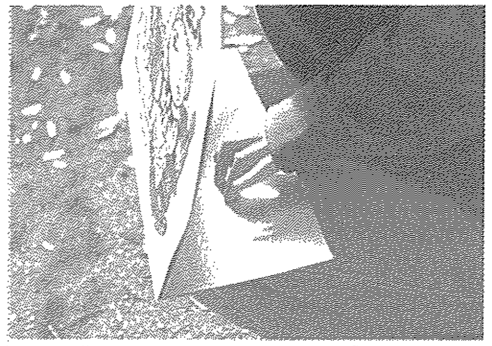
幼稚園

教　諭

学校法人宇都宮YMCA学園
さくらんぼ幼稚園
所在地：栃木県宇都宮市松原2−7−42

豊かな想像力と感性で、子どもたちの心にたくさんの種を播いています。

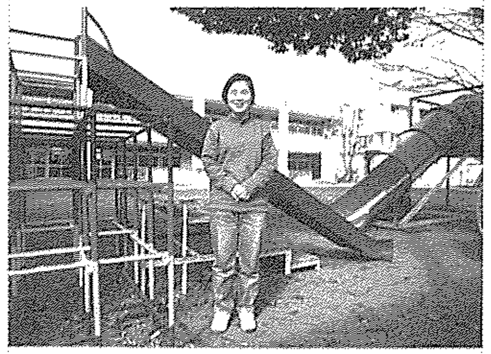
▼「折り紙は子どもと関わる良い道具です」。見えないのに折り目はぴったり。子どもたちにとって佐藤さんの手は魔法使いのよう。



▲自慢の紙芝居には点訳がついています。「もっと種類を増やしたいですね」と佐藤さん。

子どもたちと取っ組み合いの毎日です

宇都宮駅からバスで8分。広い運動場と2階建てのかわいい園舎が佐藤さんの職場です。さくらんぼ幼稚園に在籍する子どもたちは約250名。それを、19名の職員で預かっています。佐藤さんはこの幼稚園に来て7年目。特定のクラスは持たず、副担任のような形で子どもたちを広く受け持ちます。園舎にはエレベーターもありません。それでも佐藤さんは杖も持たずにすたすたと歩き回ります。子どもたちは「よしみ先生！」と抱きついたり、プロレスをしかけたり。そのエネルギーたるや、大変なもの。お弁当の時間に先生が教室に入ると、何もいわないのに園児が牛乳を持ってきてついでいます。「最初はこうじゃないんですよ。でも、一緒にいることでだんだんわかってくるんです」。お昼の後も、子どもたちは先生を放しません。「折り紙は上手だし、子どもとすぐ仲良くなってしまうので、見習わなきゃと思うんです」とは担任の大橋先生。聞けば、佐藤さんはこのクラスに入ってまだ3日目というのですから、驚きます。



Profile

佐藤 佳美(さとう よしみ)さん
1970年生まれ　31歳
障害は未熟児網膜症（1級）
幼稚園から高校までは盲学校。理療の資格を取得し、私立大学の社会学部社会学科社会福祉コースへ進学。1995年、大学を卒業後、さくらんぼ幼稚園へ就職し、現在に至る。

父母の方々の応援も力強い味方です

佐藤さんの視力は全くありません。社会福祉方面の仕事に就こうと考えていましたが、高校時代からボランティアをしていたYMCAで働きたいという気持ちもありました。その時、当時の園長先生が声をかけてくれました。「幼稚園の先生なんて、最初は私も無理だと思っていました」。障害のない人と同じにはできない、それは佐藤さん自身がいちばんわかっていることです。しかし、幼稚園が要求していたのはそういうやり方ではありませんでした。佐藤さんは運動会のような行事活動にはあまり関わりません。体育も、マット運動はできますが、ボール遊びは危ないので避けています。「その分、なるべく多くの子どもと関われるようにしています。私といることで『見えなくても、できることはあるんだ』と気づいて欲しい。大人でも目が見えないと何もできない、と思っている人は多いんです」。小さいときから様々な環境に触れさせることは、さくらんぼ幼稚園の教育理念でもあります。障害児の入園も受け入れていますし、ボランティアで父母や大学生など様々な人が活動に参加しています。「ボランティアのお母さん方には本当に助けられています。パソコンのレイアウトや校正を見てくださったり、『見ていて楽しかったから』といって紙芝居作りを手伝ってくださったり」。職員も子どもたちも父母の方も、よい意味で佐藤さんを特別扱いしていない。だからこそ、佐藤さんも無理をせず"できること"に集中して力を発揮しています。

社会福祉の分野でも人一倍活躍しています

さらに、佐藤さんは「子育てクラス」と預かり保育も担当です。「子育てクラス」は週に1回、未就園児と保護者が楽しく遊ぶ教室で、パートの教員と一緒にお話し会などもしています。預かり保育は、幼稚園が終わってから5時くらいまで園児を預かるクラスです。これも佐藤さんが責任者として顔を出し、パートの教員をまとめています。さらに、月1回の、障害児と健常児の親子活動、高齢者福祉や障害児教育といったボランティア活動も担当し、関係諸機関との調整や広報に飛びまわる毎日。最近では、総合学習や生涯教育の一環として、講演をしたりオリエンテーションキャンプに招かれたり、明るくハンディを感じさせない佐藤さんへのリクエストは多いとのこと。「大変なら車で送るよ、っていっても、さっさとボランティアさんを手配して自分で出かけちゃうんですから」とは園長先生の声。人に頼らずどこへでも出かけていくフットワークの軽さは、健常者でもそうそうまねはできません。

「今は、紙芝居作りに凝っています」という佐藤さん。お母さん方と一緒に作った点字つきの特製紙芝居で、今日も園児たちに楽しいお話を聞かせてあげています。

職場の声 ここがポイント

これからの幼児教育には、障害者教育の視点も必要になります

学校法人宇都宮YMCA学園　さくらんぼ幼稚園園長
芳賀 昭雄(はが あきお)さん

障害のある教諭の採用は佐藤さんが初めてですが、通勤手段や勤務時間も他の職員と同じです。特別な配慮といっても彼女の歩く動線には物を置かない、というくらいですね。父兄の方も自発的に協力してくださっています。園の運営に外部の方が積極的に関われる環境は、佐藤さんに限らず大切なことだと思いますね。佐藤さんには当初からの意向もあって、幼稚園の教育環境としての障害児教育や自然教育、社会教育を任せています。これからは幼稚園にも子育て支援や児童福祉といった社会的役割が求められてきます。現場の先生も研究会を開いていますが、こうした分野では、特に障害のある人が指導力を発揮できるのではないかと期待しています。